



ぱっしょたーと。2

Passiotato 2

CONTENTS

こども専用車両	
森のヒミツたち	3
BLUE RAIN 【前篇】	
BLUE RAIN 【後編】	
毎朝てんやわんや！？	

★この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。



森のヒミツたち

陽だまりの奥で、やさしさをほころばせながら、

あの子たちがあえいでいた。

自然とは不釣りあいな、あたたかい吸着音を発しながら、

ボクは、あの子たちのおだやかにもだえる顔を眺め、

あの子とおなじことを、^{こかげ}木陰でしていた。

//////////ううつ//////////

びゅびゅっ——。

びゅくっ、びゅくっ。



キャンプ場にいたあの子は、いったいどこの子だったのだろう。

さらりとした^{「がねいろ}黄金色のショート。すらりとしたからだ。水色の^{ひとみ}瞳。

なぜか友だちは、みんな知っているようだった。

みんなその子のことを『ミズキ』と呼んでいる。

ぼくにとって『ミズキ』は、キャンプ場にとつぜんあらわれたかわいい少年だった。

だれ？と問いただすと、

友だちは、なに言ってんのか？と^{まゆ}眉をよせた。

ぼくがおかしいのだろうか。

みんなとバーベキューをしながら必死に記憶をたぐりよせたけど、

『ミズキ』なんて子は知らないし、顔もみたことがない。

青い瞳のかけりは、なにか隠していそうな気がした。

みんなでバーベキューを食べながら話していると、

とつぜんミズキくんが、ぼくをちかくの森へ連れ出した。

ふたりきりになった。

気まずい。なんて話をすればいいのだろう。

あの——ミズキくんが、ぼくのほうにふりかえった。

「きみには、ぼくの妖力（ようりき）はつうじないみたいだね」

「えっ？妖力？」

「そう。ぼく、じつは妖精なんだ」

「……ん？」

一瞬にして、フリーズしてしまった。ムリもない。

「みんなぼくのことをまるで友だちのように知っているようだけど、それはぼくのでそうさせているんだよ」

「え？ということは、きみはその妖力ってのも、みんなをあやつっているの？」

「あやつってるというかなんというか……」

——どうしても、人間の子どもと、ともだちになりたかったんだ。

「もともとぼくは『ミズキ』科の“木の^{せいれい}精霊”なんだけど、ひとり森にいるのがさみしくなっちゃったんだ」

「そうなんだ。じゃあどうしてボクだけその力が効かなかったんだらう？」

「たぶん、その首からさげているものだとおもう」

ぼくは、首におばあちゃんからもらった『サカキの^{はい}灰』をいれたお守りをさげていた。

「そうか。これだったんだ。——それでも、力をつかって友だちのふりをさせるのは、おかしいとおもうな」

「・・・そう？」

「そうだよ。それだったら堂々と友だちになろうっていえばいいんだよ。へんな力使わずにさ」

『ハルキ』くんは、ともだちになってくれるかい？」

「ぼく？ぜんぜんいいよ」

「ホント？」

ミズキくんのかおがほころんだ。

「じゃあ、そのお守りを、はずしてくれないかな・・・」

「え？どうして？」

「友だちになったしるしとして、^{あくしゅ}握手したいんだ。そのおまもりがあると、ぼくはきみにちかづけない」

「そっか。わかった」

ぼくはお守りを近くの木のしたにおいた。

「じゃあ、握手」

「うん」

ミズキくんと握手をした。

刹那——^{こどう}鼓動がどくどくとはげしく脈うった。

「なんか、あっつい」

なんだか血がさわぎ、ほてってきた。。

「ハルキくん。友だちってことは、ずっといっしょにいるってことだよな」

めのまえが貧血ひんけつになったようにくらくらしはじめ、

言いようのないふしぎな気持ちになってきた。

「たのしいこと、しない？」

息切れもしてきた。全身を駆けぬける熱い血が、ぼくをそうさせている。

なんだか、カラダがいうことをきかない。

ミズキの木に背を預け、ぼくは立っているのがやっとだった。

すると、ミズキくんが、ぼくのズボンに手をいれまさぐりはじめた。

ああっ——しぜんと声が漏れる。

どうしてだろう。触られたことがなかったからかもしれないけど、

尋常じんじょうじゃないほどの“へんな感じ”が、全身を駆けぬけた。

「あっ、んんっ///ミズキ・・・くん？」

「きもちい？」

「わ、わかんない。も、もう、やめて」

「もっときもちいことしてあげるよ」

ズボンとガラパンをいっきにおろすミズキくん。

なぜかぼくのあそこが、むくむくとおきあがってきた。

「これが、ハルキくんのおちんちん」

ぼんやりとした流し目で、ぼくのを眺める。

「は、はずかしいよ。みないで」

むにゅむにゅむにゅ。

しこしこしこしこ。

しこしこしこしこ。

「ふあっ。やめ、てっ」

「こういうことするの、はじめて？」

どういふことかはわからないけど、はじめてだ。

「へんな気分でしょ？ぼくがそうさせているんだよ」

「そ、そんなあ」

「だいじょうぶ。たましいを取ってたべたりするわけじゃないから安心して。そのかわり——」

きみの^{せいりょく}精力を、ぼくにちょうだい。

ピンクのくちびるが、ぼくのをつつみこんだ。

んあアッ！——おもわず叫んだ。

とろけるような感覚。全身を駆けめぐる電気。

じゅぽ——アア、じゅぽじゅぽじゅぽ。

りゅぽりゅぽ、ン、りゅぽ、りゅぽ。
じゅる。じゅぽっ。はむっ。じゅるりゅぽっ。

連続で繰り返されるきもちい波は、なにかこみあげてくるものを運んでくる。

「どう？おちんちん、きもちいでしょ？あったかくて、ペロのぬめぬめした感じとか」

「う、う、うん////すっごい、きもちい。おしっこ・・・出ちゃいそう」

「じゅるる・・・ちゅぽっ・・・まだ、だめだよ。こんどは、ぼくにして？」

ミズキくんが、服を脱ぎ始めた。

彼のからだはなめらかですべすべしていて、とろけそうな肌をしていた。

熱をおびてそりたったあそこは、とても立派に見える。

へんな気持ちだから、ぼくはそのまま彼のあそこに目を向ける。

「ペロペロしたい？したくてしょうがないでしょ？」

う、うん——ぼくはかんぜんにミズキくんの妖術にかかっていることを確信した。

ぼくは抵抗することなく、ミズキくんのあそこをぱくっとくわえた。

「ああっ。いいっ。ぷくんだだけで、かんじちゃうう」

さァ——うごかして。ぼくがやってあげたみたいに。

「うむ・・・ン、ン、ン、ン、ン」

ム、ム、ム、ム、ちゅぽ、ちゅぽ、ちゅぽ、ちゅぽ。
ちゅぽ、ちゅぽ、ちゅぽ、ちゅぽ、ちゅぽ、ちゅぽ。

おなじリズムをきざみながら、上下になめた。

「そう。おちんちんあつよいよ。もっと吸ってみて？」

「ン……むみゅー……」

「はあああ/////ぼく、おかしくなりそう。ほしい。もっとほしいよ。ハルキくんのくちおまんこ」

ミズキくんが、ぼくのあたまを両手でおさえて、腰を上下にふりはじめた。

「んんっ！んんっ。じゅぽ、じゅぽ、りゅぽりゅぽ」

さらに速度を速める。

「あ、あ、あ、いく、いっちゃう、いくいく、イクっ」

びくびくと脈うっている。なにかこみ上げてくるのが分かった。

//////////うあああっ//////////

びゅっ！びゅびゅっ！びゅくっ。

このつづきは本編で♪